

---

# Under a full moon

北川瑞稀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Under a full moon

### 【Nコード】

N3211M

### 【作者名】

北川瑞稀

### 【あらすじ】

“ やつと笑ったなっと思ってたから ”

君が笑ってくれること。それが、僕の幸せ。

サイトからの再掲載です

ふと、ベランダでガタンと音がしたような気がして、目が覚めた。泥棒かもな…と、ぼんやりとした頭が考えるが、眠気には負けてしまふ。見に行かなきゃ、と思うのに、体はいうことをきかない。

ふたたび眠りの世界へ誘おうとしたその時、今度は本当に音が聞こえた。カーテンに遮られた月の光が、そのシルエットを映し出す。マントに、シルクハット…。こんな格好をするのは、今世間を騒がしている彼、くらいだろう。

眠たい目をこすりながら、もぞもぞと布団から這い出た。ガラガラ、という音と共にベランダに面する窓を開けた。そこに居たのは、やっぱり彼。

「…快斗」

「よお、青子」

彼女は溜め息混じりに、彼をじつと睨んだ。

「…何してるのよ、天下の怪盗様が。こんなことしてると、正体バレちゃうわよ？」

彼は得意そうに笑って答える。

「大丈夫だよ、撒いたし」

その笑顔にすこし反感を覚えた彼女は、何得意そうにしてるのよと言ってやろうと思ったが、やめた。言ったところで意味もない。

「…何しに来たの、仕事帰りに」

「いや、別に何も？」

その答えに、さらに反感を覚える。無意識に、キツイ口調になっていた。

「何も用がないなら来ないでよ、睡眠の邪魔だから」

「…冷てーの、仮にも幼馴染みだろー？」

「問答無用。関係ないわよ」

彼のおどけた口調にも、今は苛々が募る。いつもなら、こうは思わないのに。

それを彼も感じ取ったのか、彼は訝しげに問う。

「…どうした、なんか今日はいつもより厳しいな。」

「うーん…？」

彼女はしばらく考えてから答えた。別にいつも通りだと思っただけで、と。彼は納得しない顔をしつつも、「ふーん」と頷いた。二人を、沈黙が包む。その沈黙に、先に耐えきれなくなったのは彼女だった。

「今日は、何を盗んだの？」

「ん？ああ、これ」

彼が笑いながら見せてくれたのは、紫がかった色の宝石がついた指輪だった。

「きれー…」

「だろ？」

「うん」

彼女は盗んだ人間が自慢することじゃないでしょ、と突っ込むのも忘れて、その宝石に魅入っていた。

「…これ、何ていう宝石？」

「んー…何だっけ？」

「覚えてないの？」

「忘れた」

思わずくすりと笑いがこぼれる。彼女のその笑顔を見て、彼は安心したように微笑む。

「…何よ」

「ん？」

「何、笑ってるのよ」

ああ、そんなことか…と、彼はホッと息をつく。彼女が急に怒った顔をしたものだから、自分が何かしたかと思ってしまうた。

“ やつと笑ったなっと思ってたから ”

そう言おうとしたが、やめた。どうせまた、キザだ何だと言われるのは目に見えているのだし。

「…快斗？どうしたの？」

「ん？ああ、何でもねーよ」

彼は笑って誤魔化する。

今までに、何回。こうやって誤魔化してきたのだろうか。今回の小さなことだけれど、大きな嘘だって、たくさんついた。彼女が問うても、全て誤魔化した。彼女は自分が嘘をついていたことを知っていただろうし、自分が何をしていたのかも知っていただろう。何せ彼女のバックには、世間で名探偵と呼ばれる男の彼女がいるのだから。

「月…」

「え？」

「満月だね」

彼女にそう言われて空を仰ぐと、確かに満月が見える。

「で、満月がどうしたんだよ」

「…キッドが何かを盗むときは、いつも満月だよなって思ってた」

…一瞬、ギクリとした。まさか“ バンドラ ” のことがバレたのではないかと。

だがそうではなかったようだ。ただ、そう思っただけ…らしい。

「満月ってさ、不思議だよね」

「…何が？」

「うーん…綺麗っていうか…。なんか引き寄せられるじゃない」

彼女の言葉に、浅く頷く。

確かに、そうかもしれない。ボレー彗星だつてきつと、この月の妖しさに惹かれてやってくるのだ。まあ、ボレー彗星なんてものが本当に存在するのはわからないのだが。

…そう。父・黒羽盗一を殺していた奴らの言っていたことが、本当なのかともわからない。パンドラが、どういう仕組みで月に翳すと赤く光るのかもわからない。

全てがわからないことだらけ。手探りで進んでいくしかないのだ。

「…そろそろ帰ったほうがいいんじゃない？ っていうか帰って。寒いし。」

「おいおい、そりやないだろ…。つめてーの」

確かに彼女は今、本当に寒そうだ。自分は厚着をしているので、外の空気がどれくらい冷たいのかわからない。

彼女に風邪を引かせるのは嫌だな。そう思ってしまったら、自分の次の行動は早かった。

「じゃあな、また明日」

「うん、またね。おやすみなさい。」

彼女が笑顔で手を振ってくれている。その笑顔を背に、彼はベランダから飛び降りた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3211m/>

---

Under a full moon

2011年10月6日08時14分発行